

これらの遺構は、主に八世紀中葉から一〇世紀に及ぶものであり、特に調査区北半に多く検出している。

出土遺物は、土師器・須恵器・瓦の他に、木簡及び板状木製品・

自然遺物（ヒヨウタン・種子）である。

木簡は、井戸跡（径約一・四m、深さ一・七m）埋土最下層中から土師器・板状木製品・ヒヨウタンと併出している。木簡と板状木製品は、ほぼ同じ幅の両者を重ねて、二個一対の小孔を二箇所、他に一孔を二箇所に穿つて植物質の紐でとじあわせている。また、木簡の文字面は、二枚重ねの内側になっていたことから、当木簡は、板として再利用されたものであることが明らかである。なお、木簡と併出した土師器は、九世紀の特徴を持つものである。

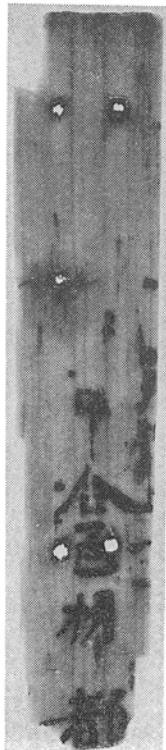
8 木簡の釦文・内容



(181) × (37) × 2 065

木簡は、両端部が切られている。両側縁は、削られたり割られた痕跡が認められる。このような両端・両側縁の状況は、本木簡が再

奈良国立文化財研究所が行つてきた平城宮跡の発掘調査において発見された墨書土器の集成である。現在まで出土した約二〇〇〇点ちかい墨書のうち、一九七六年度までにみつかつた一〇七〇点の釦文と図版とを収録しており、釦文とコロタイプ写真とを対応させて検討することができるようになっている。



利用される際に、目的に応じて再加工されたためのものと推定される。文字は、三行分認められるが、上端及び両側縁の文字は削りにより失なわれている。なお、穿孔は削りの後に行なわれたことが観察される。

9 関係文献

「下野国府跡寄居地区遺跡」（栃木県教育委員会『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』一九八二年）

（木村 等・岩淵一夫）

『平城宮出土墨書土器集成 I』

奈良国立文化財研究所編

発行所 京都市下京区油小路通綾小路下ル 真陽社
頒価四〇〇〇円